

まえがき

—新型コロナウイルスが人間社会へ残した禍根—

新型コロナウイルスは、全世界の人々を同時に VUCA（ブーカ）の時代へいざなったともいえるのではないだろうか。「VUCA」とは、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字をつなぎ合わせた言葉である。これら4つの要因により、我々の人間社会が極めて予測困難な状況に直面しているという時代認識を表す概念である。「VUCA」という用語自体は、1987年のアメリカ陸軍戦略大学の資料で使用されており、世界経済フォーラムの年次総会（通称ダボス会議）の中でもたびたび使用されている¹⁾。しかしながら、あくまで特定の地域で起きている事象を説明するために使用されたにすぎない。全世界同時に VUCA の時代に突入し、いまだ不確かなこと・不明なことが多々ある状況と共存していかなければいけないこの時代こそ、不運を幸運に変えるソリューションが見いだせたらと願う。

さて筆者が、何か怪しい病の兆しに接したのは、中国から日本の大学見学を兼ねた修学旅行に来た学生らに向けての講演依頼を受けて、東京へ出かけた2019年11月のことである。人工知能や情報系の研究をテーマとした学生らであった。午前の講演後に学生らとランチを共にしたところ、「小学生の頃からプログラミングが得意で、将来はAIを活用して、人々の生活や暮らしや街づくりに貢献したい」という大きな希望を語っていた。1週間の日程で来日しており、スカイツリーと複数の大学を見学し、それらの大学の学生や担当の教員らと交流を行った後であった。最終日の午前中は、情報化とAIの進展に伴う人と社会の変容についての筆者の講演を聴き、午後には富士山の見学へ出かけるスケジュールで、とても楽しそうにしていた。

ただ、前日に指定された宿泊施設に到着しても、誰と翌日の打ち合わせをし

たらよいかわからず、フロントで「私の依頼主はどこですか？」という質問をすると、しばらく考えた後、通訳の人の部屋番号を教えてくれた。電話をかけると、本来引率を予定されていた指導教員の先生のビザだけが出発までに下りず、学生40人ほどを通訳の人が引率して来日されていることがわかった。「明日の打ち合わせをしましょう」という筆者の提案に対し、「疲れたので部屋にいる」との回答であった。さらに、講演当日、通訳者は少し離れたところで通訳をされていた。

初対面なのに筆者はかなり通訳者に嫌われているように感じたため、最後に理由を尋ねたところ、「39度の高熱があり、ずっと抗生物質の薬を飲んでいるがまったく効かないので、うつすと悪いと思ったから離れていた」との回答だった。日本に来る前から熱はあったが、指導教員も引率できず、代理の人もいないため、休めなかったとのことであった。

通訳の方の抗生物質の効かない高熱の病は、その人だけでなく、すでに周囲の人も似た症状の人がいて、人にうつす可能性があり薬が効かない病だと認識されている様子だった。その時期には、まだ、新型コロナウイルスの存在は世界中で認識されていなかったもので、通訳の方の説明を聞いたときは、ウイルスではなく抗生物質の効かないやっかいな薬剤耐性菌²⁾が誕生したのかなと思い、山形へ向かう岐路の新幹線に乗り込むとすぐにうがい薬でうがいをした。

筆者はその後1週間ぐらいして風邪の症状が現れ、市販薬を飲んだが効かなかったので、病院へ行きいろいろな薬を処方していただいて、2019年末にはいったん回復した。2020年に入り後期の授業やレポートの採点、センター試験の監督など忙しくしている中、また新しい風邪をひいたのか、年末の風邪がぶり返したのか、風邪の治りが悪く何かおかしいと思っていた矢先のことである。1月20日に横浜港を出港したクルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号の乗客で、1月25日に香港で下船した80代男性が新型コロナウイルス感染症（以降「まえがき」では「新型」を省略）に罹患していたことが2月1日確認されたことが、各種メディアで一斉に報じられた。

ひょっとしたらこれかなと思い、さっそく保健所に連絡したが、「11月の接触で、2月になっても完治しない風邪はコロナウイルスではない」という回答

で、PCR 検査の対象外と言われ、検査は受けられなかった。ただ、そうこうしているうちに回復し、同 2 月に東京へ出張で出かけた。山形から東京へ向かう新幹線は、自由席車両がほぼ 1 車両貸し切り状態で、驚いたものだった。ただ、東京へ到着すると、空気を詰めて走っていた新幹線とは打って変わり、山手線も総武線も飲食店等も満員・満席で普段通りに混み合っていた。新幹線の利用は急激に減少したものの、生活圏内での外出を控える人は少なかったようだ。

2020 年 3 月には完全に回復し、万が一 11 月に感染した風邪がコロナウイルスだったとしても抗体³⁾ができていて人にうつすことはないかと確信していた。そのため、3 月に出かけた講演の会場で、11 月からのいきさつを最後に話したときの、一歩引かれたような人々の反応が忘れられない。

講演では、情報の信憑性の判断やネットいじめに関するテーマで、独りよがりの正義や、断片的な情報による判断が、ネットいじめや差別・偏見を醸成するというような話をした。膨大な情報があふれる昨今であるからこそ、見えやすい部分だけで判断することなく、全貌を捉えて物事を判断する必要がある。そのために、ビッグデータ分析は公正かつ公平に物事を判断するためにも重要だというような話であった。その話の流れで、コロナウイルスに関して、シミュレーションだけで判断するのではなく、きちんと実データを検査して分析し、意思決定や判断を行うべきだということを伝えたいために、11 月から 3 月にかけて筆者の身に起きたことを講演の最後に話したつもりだった。

司会者の方が質問の有無を尋ねると、すくっと手が上がった。普段は自主的な質問は出ないことが多いので、どんな質問かなと、パワーポイントをスクロールさせながら耳を傾けると「保健所には電話をしましたか？」という質問だった。「私は保健所に電話をしても対象外と言われ検査ができなかった、私と類似した人が多数いるだろうから、保健所は検査希望者を速やかに検査し、日本も海外のように実データの分析が必要だ」という話の直後の質問である。話がよく伝わらなかったのかなと思いつつ筆者は「はい」と答えた⁴⁾。

不安にさせてはいけないと思い、11 月に感染したとしても完治した 3 月の時点では抗体ができていて、抗体は抗原を攻撃したり排除したりする作用があり、抗原であるウイルスを拡散させることはないことも付け加えておいたが、

不安を抱かれた方にどれほど伝わったか定かではなく、良い思い出ではない。

この件があって以降、コロナに感染し完治した人が入社してくると拒否したり、感染者宅に投石したりする人がいた背景に、検査の不行き届きが人々の疑心暗鬼を醸成し、抗体と抗原の意味をよく理解していないことが、感染者差別や偏見の要因の一つになったのではないかと考えるようになった。

その矢先、顔なじみの保険外交員の人が研究室の前を通りかかったので、コロナデマやコロナ差別について雑談した。外交員の方は「差別してはいけないと頭ではわかっている、実際に狭い職場の隣の席にコロナ完治者が来ることになったら怖いと思う」とおっしゃった。筆者は完治すれば抗体ができるはずであることも伝えたが、外交員の方は「抗体ができてウイルスが消えることはないでしょ」と、おっしゃった。いったん感染した人は、たとえ回復しても、ウイルスを持ち続け、周囲にうつす可能性がある信じ、不安を募らせた人々もいたことを推し量った。

その一方で、ワクチン接種には、積極的な人が多いようだ。2万人が登録しているフェイスブックの某グループ内で「4月から対面授業になる予定だ。教壇に立つ高齢者にはワクチンを迅速に投与して欲しい(2021年3月)」と書かれている方がいた。ワクチン接種は、体内にコロナウイルスの抗体を作ることにより、感染を防止する行為であるので、もしも、抗体ができて感染力をキープし続けるならば、ワクチン接種により抗体保持者を増産することは、感染させる可能性のある人を増産することになり矛盾する。感染によって抗体を獲得した人に対して偏見を持つ人はいても、ワクチンによって抗体を獲得した人に対して偏見を持つ人はいなかったようだ。

また、ネット上の感染者を差別する発言を見ると、ウイルスによる感染症であるのに、「日頃の不徳がたたって感染した」というような、非科学的な因果応報として解釈しようとしている人がいることも垣間見られた。

これらの体験から、コロナ差別や偏見をする人の中には、抗体と抗原の違いを十分理解していないために「ウイルス感染者は完治してもウイルスの抗原が体内に潜伏する」という考えを持っている人や、因果応報と考えている人が一定数いたのだろう。

しかしながら、あれから2年たった今では、様相は激変した。2022年1月より山形でも無料PCR検査が誰でも受けられるようになり、対面による講演など人前に立つ機会があれば、3日前ぐらいに検査を受けに行けば、陰性証明をスマホで提示することができるようになり、不明瞭な疑心暗鬼に人々を駆り立てる要因は消滅した。

2年前はPCR検査に関して、日本国内では感染症の専門家のような人々まで偽陽性・偽陰性が出ると述べていた。WHOはそのような発信をしていないというような発言はほとんどかき消されていた。「VUCA」の中、積極的に実データを取得し、実データに基づくフローを取らなかったために、偽情報が蔓延したのである。2022年2月17日NHKのWebサイトによれば、神奈川の直近1週間のPCR陽性率が100.0%であった。99.9%でなく100.0%ということは、直近1週間に行政検査を受けて陰性だった人や偽陰性だった人が1人もいないことを示す。新型コロナ流行当初の、実データに基づかず偽陽性・偽陰性が出るという仮説を実データが覆した結果ともいえる。

ところで学力調査のTIMSSやPISAの調査では、日本の子どもたちの科学的リテラシーは高い方であるにもかかわらず、実社会の中ではなぜ非科学的な概念にとらわれがちなのか？ この問いについては、ドリル型の学習が先行し、生きた学力が身につけていないなど意見は枚挙にいとまがない。学んだ知識が生かされていない様がこのコロナ禍2年の間にいくたびも露見した。

コロナ後遺症は、倦怠感、呼吸困難、胸の痛み、脳の霧、不眠、めまい、関節痛、下痢、頭痛、発熱、咳などさまざまな症状が報告されているが、そのメカニズムはまだ解明されていない⁵⁾。ワクチンについて接種直後のアナフィラキシーや副反応については言及されているものの、10年後、20年後の長期的影響についての検証はまだなされていない。また、これまでのアレルギーの種類については食物や環境（花粉・ハウスダストなど）と関連がないことが報じられたのみで、ピリンアレルギー、マクロライドアレルギーなどの薬物アレルギーとの関連については、いまだ解明されていない。

しかしこれまで、人類は不確実なこと、不明瞭な状況と常に対峙したり共存したりしつつ、叡智をもって適切な選択をしてきた。フェイクニュースのよう

に意図的に真偽が織り交ぜられた情報を拡散することは許されないが、自然界は未知と不確実性のジャングルともいえる。

「禍福は糾える縄の如し」「塞翁が馬」などの古くからのことわざがあるように、禍が契機となり幸福が訪れることもある。コロナ禍における人々の行動には不可解な点が多数見られるが、不可解な人々の行動も含めて社会は成り立っている。コロナウイルスが人間社会へ残した禍根は何か、そして、その禍の後にはどんな福が来るのか議論したい。

そして、コロナ禍に遠隔授業（オンライン授業）を余儀なくされ、パソコン画面を見続ける学生生活に落胆している学生、コロナ鬱になっている人、コロナの影響で人間関係・学業・仕事等に悩む人々すべてに、本書がコロナ禍の後に来る「福」と希望を与える契機になれば幸いである。

2022年2月吉日

加納 寛子

注

- 1) U.S. Army Heritage and Education Center (Nov. 22, 2021) <https://usawc.libanswers.com/faq/84869> (2022年1月31日アクセス)
- 2) 抗菌薬が効かないもしくは効きにくくなった細菌のことを薬剤耐性菌という。細菌は単細胞生物（1つしか細胞がない生物）の一種で、ウイルスは細菌の50分の1程度の大きさで細胞を持たない。ウイルスには細胞がないので、他の細胞に入り込んで生きていく。
- 3) 抗体は免疫グロブリンというタンパク質であり、ウイルスや細菌など免疫反応を引き起こす異物（抗原）が体内に入ってきたときに、攻撃したり排除するように働く。抗体は感染し完治した後に獲得される他、ワクチン接種により獲得される。
- 4) 2020年2月以外にも、3度保健所には電話をしたことはあるが、3度とも対象外と言われ、検査の対象になったことはない（2021年3月）。ただし、2022年1月より山形でも無料PCR検査が普及したため、2022年現在ではこのような事態は起きなくなっている。
- 5) NHS (National Health Service) Long-term effects of coronavirus (long COVID) <https://www.nhs.uk/conditions/coronavirus-covid-19/long-term-effects-ofcoronavirus-long-covid/> (2022年1月31日アクセス)

新型コロナウイルスが人間社会へ残した禍根
— 渦中に見いだされたセレンディピティとコロナ世代の可塑性 —

目 次

まえがき 加納 寛子 … i

第1章 新型コロナウイルスが人間社会へ残した禍根とコロナ世代の誕生

..... 加納 寛子 … I

1. コロナ禍が起因となり分断される人々 1
 - (1) 家庭内で起きた分断 1
 - (2) 地域に広がった差別と分断 7
 - (3) フェイクニュースと誹謗中傷 12
2. ワクチンはコロナ禍に終止符を打つことができるのか? 15
 - (1) 抗体の持続性の問題 15
 - (2) コロナ禍のもとでの人々の行動 17
 - (3) ワクチンの開発とその効果 22
3. コロナ禍のもとでの教育現場はどうだったのか? 24
 - (1) コロナ禍のもとでの学校の休講状況と遠隔授業に関する国際比較 24
 - (2) 遠隔授業を受ける学生の環境は整っていたのか 26
 - (3) コロナ禍で全面遠隔授業となっていた時期の学生の状況 32
 - (4) コロナ禍のもとでの教育と教員の意識に関する実態調査 34
 - (5) コロナ世代が築く未来 51

〈資料〉さまざまなスマートシティプロジェクト 54

第2章 ポストコロナ社会のコミュニケーションのリスクと可能性

..... 櫻村 愛子 … 63

1. 「コミュ障」にとってコロナ禍社会はどういう環境だったのか 63
 - (1) コロナ禍社会における「コミュ障」の困難 63
 - (2) ルーティンの消失した生活での「コミュ障」の困難 65
 - (3) 社会の解体と「コミュ障」の人々 67
2. 学生へのアンケート調査から 70
3. 教室空間の構造と新しい教育 72
4. 若者のコミュニケーション—「コミュ障」のコミュニケーションの文

- 脈— 74
- (1) インターネット・コミュニケーションの現在 74
- (2) ネットいじめとゲーム障害 75
5. コロナ禍のもとでの差別とデマ 77
- (1) コロナ禍と「制度化された人種主義」 77
- (2) アルカイックな心性と差別 78
- (3) 規範の感情的起源 82
- (4) 「ヘイト」と「フェイク」の結合 83
- (5) 「中立性」という倒錯と「J問題」 85
6. 新しい社会におけるコミュニケーションの可能性 88
- (1) 「人間主義の非人間性（閉ざされ）」と「脱人間主義の人間性（開かれ）」 88
- (2) コロナ禍のもとで可視化される「身体」 89
- (3) 複数の身体とコミュニケーションの可能性 — 「トラウマ」概念の再考— 92

第3章 コロナ禍におけるコミュニケーションと映像メディア

..... 大野 志郎 … 101

1. #PlayApartTogether：コロナ禍におけるゲーム推奨の是非 101
2. 若者の外出自粛状況 105
- (1) 外出時間、在宅時間 105
- (2) 外出自粛の意識 106
- (3) 新型コロナウイルスへの危機感・恐怖 109
3. 緊急事態宣言下の映像メディア、ゲームの利用状況 111
- (1) 映像メディア利用の増加 111
- (2) 学生の映像メディア利用とその効用 114
4. 社交性と自粛意識 116
- (1) 外出自粛意識と社交性 117
- (2) 映像メディアと社交性 119

5. 今後の懸念と対策 122

第4章 コロナ禍の下で、大学生活を充実したものにするために

— 学生運動が盛んな時期に入学した—教員の回顧—

..... 葉養 正明 … 128

1. コロナ禍の中の大学キャンパス 128
2. 田舎から出てきた筆者を待っていたもの 129
3. 大学キャンパスのロックアウトの中での学生生活の悩みと工夫 130
 - (1) 勉強面では 131
 - (2) 生活面では 133
4. やがて訪れるポストコロナの時代への準備 135

第5章 大きなコロナの禍の下で、教える・学ぶ …………… 河野 義章 … 137

はじめに 137

1. 2つのオリンピックの間で 138
 - (1) 東京オリンピックの情報処理 138
 - (2) 教具史観 138
 - (3) 外的制御から内的制御へ 139
2. プログラム学習とティーチングマシン 140
 - (1) なぜプログラム学習が必要か 140
 - (2) プログラム学習の原理 141
 - (3) 3つの情報の流れ 142
 - (4) なぜプログラム学習は普及しなかったか 143
 - (5) 東京2020 144
3. コロナ禍の影響 145
 - (1) 企業の脱東京 145
 - (2) 大学の都心回帰 146
 - (3) 大学の対応 147
 - (4) OHP型とアナライザー型 148

4. 教えること 150
 - (1) ファカルティ・デベロップメント 150
 - (2) 授業をみる 151
 - (3) 授業のモデル 151
 - (4) パブリック・スピーキングスキル 153
5. 学ぶこと 155
 - (1) アクティブな学習者 155
 - (2) 成熟した学習者 156

第6章 新型コロナウイルスと日本社会、そして改革の提言

— コロナ対策と劣化した社会の再編成を一つの動きとして行う —

……………内藤 朝雄 … 161

1. 新型コロナウイルスの特徴と一石二鳥、一石三鳥、一石四鳥のシステム
転換 161
2. 人類と新型コロナウイルス 164
3. 新型コロナウイルスが出現するまでの日本社会 166
4. 中間集団全体主義のコスモロジーの核としての自己裂開規範 174
5. 構成要素間のささえあいの論理 179
6. 新型コロナウイルスと日本社会 — 改革の提言 — 180
7. 新型コロナウイルス被害産業と医療改革 181
8. 労働時間の短縮 184
9. 国家と新型コロナウイルス 184
10. まとめ 185

第7章 禍福は糾える縄の如し

……………加納 寛子・櫻村 愛子・大野 志郎・葉養 正明・

河野 義章・内藤 朝雄 … 188

1. コロナ禍のもとで授業はどう変わったか 188
2. コロナ禍での大学等退学者減少をどう見るか 191

- (1) 退学者の減少について 191
- (2) 休学者の減少について 194
- (3) 海外留学について 196
- 3. 学生をとりまく環境の変化 198
 - (1) 経済的困窮者の増加について 198
 - (2) 学びの環境について 199
- 4. コロナ禍のもとでの大学教員の苦悩 202
 - (1) 教員のスキルについて 202
 - (2) 大学教員の仕事 204
- 5. コロナ禍での新しい社会 206
 - (1) 縮小社会を見つめる 206
 - (2) 新しい時間と場の経験 209

執筆者紹介 217